モルヒネ

作：中島　栄子

登場人物

広瀬貴実子
母
父
祖母
おば

一場

上手　病室と病室のドアがある。病室にはベットと棚。
　　ベットの上に母。貴実子が向かいの椅子に座っている。

上手のみ明かりが入る。

貴実子が何やらメモをとっている。

母　　あんたもっと早くきてよ。お父さんはあてにならんのやけん。
貴実子　ごめんって。探しよったとよ。なかったけど。
母　　ちゃんと探したとね。
貴実子　探したよ。
母　　どこ探したと？
貴実子　本棚の下の引き出し。大事なもの全部あそこに突っ込んどうやん。
母　　そこやないと。
貴実子　じゃあ、どこ？
母　　タンスたい。タンスの一番上の左の引き出し。あそこにまとめとると。
貴実子　そうなんや。じゃあ、帰ったら見てみる。
母　　うん。
貴実子　本当はこういうのお父さんがするんやけどね。
母　　お父さんはしきらんと、こういうこと。あんた、明日には行っとかんと。
貴実子　明日って……。
母　　……すぐ凍結されるっちゃけん。ああいうとこは。
貴実子　でも明日って。
母　　まとまったお金下ろしとかんと。あんたには払えんやろうが。
貴実子　さすがにお父さん払うやろ。どうにかして。
母　　……。
貴実子　料金ってさ、結婚式みたいにさ、後で払ったりできんとかいな。冠婚葬祭って言うやん。お葬式も、式やん？
母　　はー。馬鹿言わんと。だいたい結婚式みたいにご祝儀でまかなえるもんやないと、お葬式は。
貴実子　馬鹿じゃないよ。……馬鹿はお父さんやん。
母　　そうやね。
貴実子　昨日は？お父さんなんて？

母　いつもどうりたい。腹ん立つ。来てからすぐ「もう帰っていいか」って。なんのためにきたか、いっちょんわからん。来るのも夕方来てから。
貴実子　うん。
母　あんた、お父さんに財布握らせんとよ。ちゃんとあんたが管理せんと。借金背負ったらどうするね。
貴実子　何度言ってもね。お父さんってなんであんな買い物好きなん？好きなだけならいいけど、なんであんなしょっちゅう騙されるんやろ。
母　貴実子。今度からあんたがしっかりせんといかんのやけん。
貴実子　そうやけど。
母　あの人は喪主とかできるとかね。
貴実子　いや、でも、お父さんがおるのに長女の私がするのはおかしいやろ。喪主挨拶は。そこはさ、旦那の役割やん？一般的に？

母、体をベットの上の方に動かそうとするが腕が震えてできない。
貴実子、母の腕の下に自分の腕を入れて母の体を上に移動させる。

母　どーら、こら。こら、いかん。

貴実子、母の背中に枕を入れる。

母　貴実子。お墓の話やけど。
貴実子　お墓はあそこの納骨堂でいいやろ。え？
母　その話やないと。あんた婿に入ってもらわんといかんよ。
貴実子　は？？
母　娘のあんたしかおらんのやけん。広瀬家を継いで行けるの。
貴実子　じゃあ、私は一生、広瀬貴実子？
母　そう。やけん婿にきてもらえるような人を、捜さんと。
貴実子　またハードル上がるやん、結婚の。ええー。そんな重たい遺言やめてよ。
母　しょうがないやないの。お墓守っていかないかんのやけん。
貴実子　いや、待って。だって、うち、老舗の酒蔵やら旅館とかじゃないやん。普通の、普通の広瀬家やん。
母　墓をほったらかすわけにはいかんやろうが。あんた、いい人おらんとね。
貴実子　……。
母　ええ？お母さん聞いてないよ。
貴実子　うーん。なんとも。
母　なんとも、ってなんよ。

貴実子　なんとも、はなんともよ。
母　いい人おるんならなんでもっと早く言わんとよ。会わせてくれたら良かったのに。
貴実子　ちょっと遠くにおるし。
母　ええ？どこ？
貴実子　東京。
母　東京！？ええ！？いつの間に？
貴実子　まあ。
母　えーなんでそんな都会の人と？そんな、東京の人とか、絶対こっちにきてくれんやん。
貴実子　そもそもこっちにくるメリットがないしね。ここは職がないもんね。
母　じゃあ、お父さんどうすると？
貴実子　やけん、ここにおるやん、私。
母　でもあんたもいい年やし。いい年をすぎたいい年やし。
貴実子　やめて。そういう言い方するのやめて。私、結構若く見られるとよ。彼氏も年下やし。
母　ええー！年下なん？。あんた子供の頃から渋好みやけん、お母さん、えらい年上連れてきたらどうしようかと思いよった。
貴実子　人の好みは変わると。同じくらいの年の人は、だいたい結婚しとるしね。
母　年下とか、お母さんここにきてびっくり。幾つ下なん？
貴実子　秘密。
母　なんで秘密にするとよ、母親に。貴実子ー。ええーお母さん気になる。気になったままあの世に行けなーい！
貴実子　行かんどけばいいやん。最近元気やし。
母　そうでもないと。
貴実子　そうなん？
母　うん。
貴実子　……。
母　……。どんな人？
貴実子　まだ終わってなかったか。
母　どんな人なん？少し。
貴実子　あの写真みたいな人。

母、ベッドの上に置いてある手提げをとろうとする。が、腕の力が弱くて取れない。
貴実子が手提げの中からポーチを取り出し、男性の証明写真を取り出して母に渡す。

母　ええー、本当？

貴実子　うん。しかもこの証明写真より、お母さんの実家のアルバムの写真が近い。
母　あの、ブイブイ言わしとう写真？
貴実子　そうそう。あのチャラい感じの写真。海のやつ。
母　ああ、やっぱりあんたと私、親子やね。お母さんも遠距離しよったとよ、大阪の人と。
貴実子　知っとる。お母さんの実家からわざわざその証明写真持ってきたの、私やん。
母　あの頃は、手紙やったんやね。
今みたいに携帯があるわけじゃないし。公衆電話から会社の寮に電話かけて、引き継いでもらうしかなかったもん。
貴実子　それやったらあんま電話できんかったね。
母　十円、沢山用意してから。
貴実子　百円入れればいいやん。
母　お釣りもどってこんとよ、百円は。もったいなかろうが。
貴実子　テレフォンカードは？
母　お母さんの頃はなかったと。あんた達は携帯もあって、いつでも電話できるやろうけど。
貴実子　やけん、手紙か。
母　手紙は読み返せるし、消えんけんね。
貴実子　あれ、全部取ってるん？元のお菓子箱に戻したけど。
母　うん。お母さんの青春やけん。
貴実子　意外やった。お父さんと正反対やん。なんかさ、写真から醸し出されとるよね。
俺モテます、自覚してます、みたいなさ。まあ、かっこいいとは思うよ。背も高そうやし。
母　高かったよ。足も長かったと。
貴実子　あの手紙の量だと、結構長く、付き合っとったんやろ。
母　そうやねえ。
貴実子　私あの人、かっこよすぎて嫌やん。
母　なんで。男っぽくて頼りがいもあったとよ。
貴実子　……手紙は読まんかったけん、性格とか知らんけどさ。あの人の後で、よく地味なお父さんと結婚したね。
母　そら、あんたもう。流るる雲の如し、よ。
貴実子　何それ。
母　もうね、お母さんは船に乗せられたようなもんやったと。一度会ったら周りがどんどんどんどん進めていってから。あっという間にひきかえせんとこまで行ったと。
貴実子　何それ、怖っ。

母　お母さん、大失恋した後やったし、昔は二十五過ぎたら行き遅れって言われよったし、田舎の目もあるし、従兄弟の紹介なら大丈夫かなって思ったし。

貴実子　真面目そうやったし、黙ってたらそれなりに、キリッて昔は見えたやろうし。

母　教師やけん、将来の心配もないと思ったし。

貴実子　ないどころか、こんなに金遣いの荒い人って思わんかったし。

母　あんなに帰ってこない人って思わんかったし。お母さん新婚なのに一人でから。あんまり寂しいけん、造花を作る内職してしまった。紙をくるくるってして。花、作っても作ってもお父さん、帰ってこなくて。

貴実子　なぜその時点で離婚せんかったんかね。私もまだおらんかったのに。

母　田舎はねえ、そうもいかんとよ。そら女がおるとかやったらともかく、あの人の場合は、単に帰ってこんだけやったけんね。

貴実子　お父さんってなんであんななん？家には帰ってくるもんっていう概念が、そもそもない感じやん。

母　……どうもねえ。あんたのおじいちゃんも、帰ってきたりこなかったりみたいでから。

貴実子　おじいちゃん……。あんなにちゃんとした人やったのに。

母　ちゃんとした人ねえ……。どっちがどっちなんやろうねえ。

貴実子　おじいちゃんは立派やったやん。国から表彰もされよったし。私をいろんなところに連れて行ってくれたもん。お父さんは連れて行ってくれんかったのに。

母　あんたが覚えていないだけよ。海やら映画やら、連れて行ったことあるとよ。

貴実子　何回かやん。

母　何回かやけど。

貴実子　私三、四才くらいやったのに、海に放置されたの、未だに覚えとうとよ。お父さんにバケツとコップ渡されて「ここにいなさい」って。きづいたら大人の人に「お父さんお母さんはどこ？」って聞かれて、海見たら、お父さんが丸い浮きが並んでるところをちょっと超えたところで、泳ぎよった。あれ、今思えば「これ以上超えたらいけません」っていう浮きやったと思うんよ。違反やん。私、よく死んだり誘拐されんかったなって。あ、やけんそれで覚えとるんや。命の危険感じたけん。それに映画だって、怪獣怖くて私が泣いてるのに、お父さん横でずっと笑ったままやった。今思えば、子供があんなに泣き叫んだら、いったんロビーとかに出らないかんかったんやないかなって思うんやけど。

母　怪獣やったら子供向けやったんやろ。あとアニメも連れて行ったことあるよ。

貴実子　旅行も行ったことないし。お父さん、お母さんの実家に行ったこともないやん。

母　四回くらい、行ったことあるよ。

貴実子　私生まれてから、一回も行ったことないやん。

母　それはもういいと。あの人連れてったら、めんどくさいだけやったけん。

貴実子　ほら。
母　いいと。あんたが生まれたけん。お父さんおらんかったら、あんた生まれてきてないんやけん。
貴実子　そりゃそうやけど。でも違う人と結婚しても私きたかもよ。よく言うやん、子供は自分で生まれてくるところを選んでくるって。
母　わからん子やね。違う人と結婚して生まれた子供は、もうあんたじゃなかろうもん。
貴実子　ええー。
母　それはもうあんたじゃないと。
貴実子　……。
母　なん拗ねようとね、小さい子供みたいに。
貴実子　いや、だって、なんかさ。ダダーンってきた。ダダーンって。
母　……ダダダダーン。
貴実子　うん。
母　なんで。
貴実子　ええ？わからんの？じゃあ、もういい。
母　確かにお父さんあれやけど、お父さんはお酒に溺れたり、女がおったりしたわけじゃないし。暴力も振るったりしたわけじゃないし。
貴実子　……え？
母　お母さんが入院してからは帰ってきよろうが。
貴実子　……まあ。いや。帰ってきててもあんだけ騙されて金なくなったら、どっちがマシとかないやん。この間もまた騙されて、一ヶ月で金、百二十万買ってて、二十万損したんよ。なんのチャラよ。何もチャラにならんよ。
母　金って金銀の金？
貴実子　そうよ。金の延べ棒の金よ。電話のセールスがかかってきて、そのままお金振り込んで。電話だけで現物も見てないのに。私はお父さん宛のハガキで知ったんよ。もうさ、消費者生活センターのお姉さんも手に負えんってなって、市がやりよる無料弁護士相談を紹介してくれて。
母　それ、いつの話？
貴実子　先々月の話。
母　……。
貴実子　それは私が一ヶ月で気づいて、やめさせたけん、もう大丈夫。
母　あん人は、ほんと。
貴実子　そうよ。今は毎日家に帰っては来とるし、お母さんの病室にもわりかし来とるみたいやけど。
母　来てもちょっとしかおらんけど。

貴実子　お母さんも、お父さんにちゃんと、あれしてこれして言わんとわからんのよ。お父さんは、お父さんなんやけん。普通の人と違うんやけん。私は明日もくるけど。

母　先に銀行行ってこんと。

貴実子　……うん。行ってからここにくるけん。じゃあ、もう帰るね。

貴実子、証明写真をポーチに入れて手提げに入れる。

貴実子　この写真さあ、ここに置いとくの危なくない？私が毎回持ってこようか？

母　大丈夫。

貴実子　いや、でもお父さんとか親戚に見られたらさ。それか貴重品の箱に入れておこうか？

母　気が向いた時に眺めるけん、ここでいいと。

貴実子　……そう。じゃあね、また明日ね。

母、目を瞑る。

貴実子、病室のドアをあけて病室を出る。

貴実子、ドアを閉める。

上手明かりが消えるのと同時に、貴実子にサス。

貴実子　驚いた。母は父の暴力を覚えていなかった。……小学校二年生の時には始まっていた暴力。いきなり怒鳴って、拳が頭の上をかすめて、壁に穴があいた。怒りにまかせて蹴られて凹んだ、買ったばかりの炊飯器。なんであんたはこんなにできないんかね、という言葉。眠りたいのに、夜中にいきなり始まる掃除。友達の前で蹴られて友達がびっくりして泣いた。……数え切れない。そうか、私もそこまで覚えてない。覚えているのは最初の頃のだけ。父がなぜ急に怒り出すのか理由はどれもわからない。父の理由はいつだってわからない。この間は雨戸だった。昼間なのに雨戸を閉めたままだったから開けたら、泣きながら足を床に叩きつけたのだ。ドンドン。「お父さんが開けるって言ったろうが！」……理由はわからないと今言ったけど本当はわかっている。最近わかった。消費者生活センターから弁護士から市役所の包括支援センターにつながって、検査受けることになって、それでわかったんだった。―発達障害だって。全部脳のせいなんだって。お父さんに悪気はないんだって。お父さんも辛いんだって。だから父は何回だって騙される。世の中には悪い人がいることが理解できないから。貯金が実際今本当はどれくらいあって、今後のためにどれくらいいるかも、わからない。雨戸はいきなり開けられると、パニックなるほど辛い。

貴実子　もうこの年になれば薬を処方するのもあれだし、家族が、こっちが一方的に合わせ続けるしかないんだって。団体行動もできないから老人ホームも難しいだろうって。だから私はしばらく父と暮らさないといけない。母はもう家に帰ってこれないのだから。本当に？――本当に。

二場

上手　病室。ベッドと棚が置いてある。
下手　葬祭場の待合室。和室。

上手だけ明かりがつく。

貴実子、病室のドアを開けて入ってくる。
母、寝ている。
貴実子、そっと棚の中に下着やタオルを詰める。
貴実子、棚の上に置いてある紙袋を見て、その中に入っている洗濯物を、自分が持ってきたエコバックに詰める。

携帯のバイブ音。
貴実子、カバンから携帯を取り出して画面を眺める。
貴実子、何かを打ち込んでから携帯を鞄に入れる。
貴実子、椅子に座り、母親を眺めている。鞄からパンフレットを取り出して眺めている。
母、目を覚ます。

母　　貴実子。来とったとね。

貴実子、パンフレットを鞄にしまいこむ。

貴実子　今、きた。寝てていいよ。
母　　そろそろ起きとかんと。気づいたら寝とってから、いかん。
貴実子　明日、おばちゃん達来るって。昼すぎ。二時くらい。お土産に欲しいものあるかって。

母、震える手で枕の後ろからメモを取り出して、貴実子に渡す。
貴実子、メモの字がミミズ文字のため、なんとか解読しようとする。

貴実子　あ、これ、「う」か！はいはい。梅干！ああ、ばあちゃんのつけた梅干ね。

母、うなづく。

貴実子　これ何？イ、カ……。イカ？……イカ焼売や！いやいや、食べれんやろ。

母、首を横に振ってイヤイヤをする。

母　　少し。

貴実子　えー、もう。

貴実子、メモを再び見る。

貴実子　はいはい。だいたいわかった。連絡しとく。

母、不満そうにしている。

貴実子　ちゃんと全部持ってきてもらうってば。あの直売所のイカ焼売とみかんと梨、おばあちゃんの梅干とお煮しめ（多め）。

母　　残ったらあんた達で食べんね。

貴実子　わかった。明日皆で食べよう。

母、うなづく。

母、棚を指す。

母　　あれ、出して。

貴実子　ああ。明日、皆に見せるん？

母　うん。

貴実子、棚の中から鮮やかでお洒落なエプロンを出し、母の上に置く。

母、嬉しそうにそのエプロンを愛でる。

貴実子　よくそんなの売ってたよね。さすが病院の売店や。

母、ひととおり愛でてから貴実子に渡そうとする。

貴実子、受け取ってまた大事に棚に戻す。

貴実子　おばあちゃんの梅干楽しみ。どこのよりも美味しいもんね。おばちゃん達、新幹線やなくて車でくるって言いよったけん、いろいろ沢山もらえるかも。
母　前の時は、新幹線やったけん、あんまり頼めんかったもんね。車なら、きっと、お米もくれるよ。
貴実子　お母さんも昔は、田植えしよったん？
母　たまに手伝わされよったよ。今はもう自分達の食べる分だけしか作りよらんけん、手伝うほど広くないけど。
貴実子　おばあちゃんとこのお米、ふっくらしてツヤツヤなんよね。おじちゃんに聞いたらさ、お米の気持ちに合せてあげよるんって。なんとなくわかるらしいよ、稲の気持ち。
母　ふっ。
貴実子　あっ。動物に気持ちがあるように、植物にもあるらしいよ、ふわって伝わってくるらしい。
母　そうたい。
貴実子　おばあちゃん家ってさ、素朴な楽園って感じやね。都会的なもんはなくても、豊かっていうか。家族旅行をしたことなくても、お盆におばあちゃん家に行くの、十分楽しかったよ。賑やかで。
母　皆あそこに集まってくるけんね。……来るの、二時ね。
貴実子　それくらいの時間の方がバタバタせんやろ。お互い。
母　お母さんは別にバタバタすることないけど。
貴実子　そうやけど。ほどよい時間と思うけどね。
母　……。
貴実子　なん？
母　いや。わからんことあったら、おじちゃん達を頼りなさい。
貴実子　うん。
母　広瀬家は多分何もしてくれんけん。あんたのお父さんも多分たいしたことしきらんけん。
貴実子　うん。
母　段取りはちゃんと葬祭場の人が説明してくれるから。しっかり聞いて。
貴実子　うん。
母　横にお父さんも置いて。
貴実子　お父さん、じっとしきるかいな。気づいたら、どっか行っておらん、みたいなことにならんかいな。不安や。お父さん携帯持ってないし。
母　なんか持たしとき。あんたの貸すとか、なんでもいいけん。
貴実子　首に縄つけときたい。なんであんなに消えるんやか。
母　買い物たい。やけんお父さんに買い物いかせたらいかんよ。

母　時間までに戻ってこんかもしれん。
貴実子　わかった。必要なものが出てきても、お父さんは喪主やけんって、葬祭場から出さんけん。
母　そうよ。お母さんのお通夜とお葬式が、ちゃんと時間どおりに始められるか、あんたにかかっとるんやけん。あんたのおじいちゃんの時、大変やったろうが。
貴実子　なんかあったっけ？お父さんがどっか行って帰ってこんかったん？
母　あんた。覚えてないとー？
貴実子　……特に。
母　もめたやん。
貴実子　だって子供達、違う部屋にやられたやん、確か途中で。そうよ、トイレあっちの部屋にあったのに。
母　ちょうどあんたが入ってきたとよ、トイレしに。一番もめてる時に。
貴実子　……覚えてない。従兄弟に会ったことしか覚えてない。え？私中学生やったよね？何でこんな覚えてないんやか。怖っ。
母　おばあちゃんがお葬式出たくないって、トイレに立てこもってから。
貴実子　えー……？あ。おばちゃんが怒鳴りよったやつっけ？
母　そうよ。
貴実子　……「お母さんの金、お母さんの金って言うけど、あれは父さんが頑張って働いた金よ！」わ、思い出した！それだけは覚えとった。そうやん、お父さんのお金の使い方、おばあちゃんとそっくりやん！
母　そこもやけど、そこじゃないと。
貴実子　そこじゃない……。
母　あの女と息子に会いたくないって、おばあちゃんが言い張ってから。
貴実子　ああ！同じ団地に住んどったんやったっけ。
母　そうよ、みかんを届けに行きよるとこ見たことあるもん。……お母さん、見てしまった。
貴実子　某家政婦さんみたいやね。

母、しっかりうなづく。

貴実子　結局おばあちゃん、お葬式どうしたっけ？出たっけ？

上手、明かり消える。
下手、明かりがつく。

下手、二十五年前の葬祭場の控え室。

和室。トイレのドアが中央あたりにある。
トイレに祖母が立てこもっている。（祖母は声のみ）
母、おばがトイレのドアの前にいる。
貴実子、手前の障子をあけて（実際障子はないので、ジェスチャー）入る。

障子を開ける音

おば　母さん、出てきて！
祖母　嫌！嫌なもんは嫌！絶対、お母さんはここを動かんけん！
おば　もう何言いようとって。母さんが出らんわけにはいかんやろ。父さんの最期よ！

手前の障子のところから、父が入ってくる。

父　姉ちゃん。義兄さんが今斎場の人とお坊様に、始まりが遅れるかもしれんって言いにいったけん。

母、振り向いて貴実子が入ってきていることに気づく。

母　あんた、なんでここにおると！どうしたとね。
貴実子　トイレ。
母　ロビーのトイレにいかんね。
貴実子　ええ？
母　早くあっちに行きなさい。

母、貴実子を障子の外に追いやる。

貴実子　なん、どうしたと？
母　何もないと。
貴実子　おばあちゃんトイレにおると？
母　そう。
貴実子　大丈夫なん、おばあちゃん。
母　大丈夫と。はよ、行きなさい。早く。
貴実子　あっち寂しいもん。そんな会ったことないのに何話していいかわからんし。
母　とにかくこっちはダメと。今ここは、大人のゾーンと。
貴実子　なん、大人のゾーンて。
母　子供が入ってくるところじゃないと。トイレはロビーに沢山あろうが。

おば　絶対そんなことさせんって！
祖母　あいつが全部持っていくとよ！
おば　もっていかんって。いかせんって。持っていけるわけないやん、母さん。
祖母　一円もあげない。お母さんのお金やもん。お母さんのやもん。お母さんの好きにすると！絶対あの女には渡さん。
おば　お母さんの好きにするって……。お母さん！あれは、父さんのお金よ！父さんが頑張って働いて稼いだお金よ！見境なく湯水のように使ってから！あのお金はね、お母さんだけのものやないと！好きに使っていいものやなやないと！いい加減にして母さん！
祖母　なんであんたそんなこと言うとね！誰もお母さんの味方してくれんのやね！
おば　味方よ！私は母さんの味方よ、なん言いよると！お願い！言うこときいて！
祖母　頑張ってあんた達を育ててきたのに、なんね！お米だってあんな大変な思いして。
おば　うんうん。闇市で大変やったよね、ありがとう、母さん。
祖母　重くても頑張ってお腹に隠してきたのに、警察に全部持って行かれてから。あんた達食べさせないかんのに。
おば　うんうんうんうん。だったら、余計お葬式には出なきゃ、母さん。
祖母　どうして？
おば　堂々としとけばいいんよ。母さんが妻なんやけん。私達を育ててきたんやけん。
祖母　お葬式出たら、顔合わせるもん。絶対に嫌。お母さんは出らん。
おば　出らん、じゃないとよ、母さん。本当にそれでいいと？もう本当にお別れなんよ。お別れよりも、そんなことが大事？
祖母　そんなことってなんね！
父　姉ちゃん。
おば　なんね。
父　もうお母さんは出らんでいいっちゃないかね。
おば　……なんて？
父　もう始まるけん。お母さん抜きで。
おば　……何言いよると、あんた。

母、急いで控え室に戻る。

母　お義母さん、その人来る来る言いますけど、その人どうやってくるんですか？
おば　……！
母　その人どうやってくるんですか？知りもしないのに。お義父さんが亡くなったことも、ここの場所も知らないのに。どうやってくるんですか。
おば　……そうよ！そうよ、母さん！誰も知らせてないんだからくるはずがないのよ。

おば　来れないの！
父　そうやん、母さん。
おば　ちょっとあんたは黙っとって！ほんと役に立たん。母さん、出てきて。一緒に父さんのお葬式しよ。母さん。

母、まだ貴実子がトイレに行ってないのに気づき、障子を閉める。
閉める音とともに下手暗転。（下手は転換に入る。のちに広瀬家の仏間になる）
上手、明かりつく。

母　出たよ、ちゃんとお葬式。そりゃお義母さんが本妻なんやけん。
貴実子　その人達、きたん？
母　来てないよ。
貴実子　うわ。残酷やね。
母　なんが残酷ね。なんで残酷？
貴実子　……。
母　あんた、まさかその東京の人……！
貴実子　違う違う、不倫じゃない。ただやっぱなかなか会えんけん、意思疎通がね。
母　あんたは、不倫はしてないんやね。
貴実子　うん。そんなめんどくさそうなことしないよ。
母　なら、ひとまずいいたい。
貴実子　うん。
母　じゃあ、なんで残酷なんよ。自分で選んだ道やないの。お葬式なんて参加できるわけないやん。図々しい。
貴実子　いや、だってさ。おばあちゃんってああいう人やったやん。お父さんと全く同じやったやん。いや、好きよ、おばあちゃんのことは。大好きよ。私にとっては天真爛漫なかわいいおばあちゃんよ。でもさ、おじいちゃんは……疲れたと思うんよ。……私達みたいに。
母　……。
貴実子　同じ団地に住まわせてさ、子供も認知してさ。それってもう隠してもないやん。昔はお妾さん制度があったんやろ？
母　いつの時代の話をしようとね、あんた。
貴実子　離婚しようと思えばできたと思うんよ、おじいちゃん。
母　……。
貴実子　……お母さんが仕事しよる時、小学校終わったらいつも、おじいちゃんとおばあちゃんのところに行きよったやん、私。でもおじいちゃんとおばあちゃんって、特に会話しよった感じなかったもん。

貴実子　……おじいちゃんにしたらさ、おばあちゃんよりもずっとその人の方が、まともやったんやないかな。おばあちゃんとのストレスをその人で抜いてたから、夫婦を保ててたんやないかな。

母　離婚て。おばあちゃん一人で生きていけるわけないやん。足だって悪いのに。

貴実子　やけんよ。おばあちゃん、あんまり歩けん人やったやん。やけんさ。

母　なんね。

貴実子　見捨てられなかったのは、おばあちゃんの方やったんやない。

母　……なんてこと言うと、あんた。

貴実子　話は通じない、なんでそんな行動とるかこちらは意味がわからない、金はじゃんじゃん悪びれもなく考えずに使う、家事もあまりできない、そして仲がいいわけでもない。

母　夫婦仲のことなんて子供にわかるもんね。なんだかんだ、一緒におったんやろうもん。

貴実子　うん。一緒にテレビ見よった。

母　いいやないの、傍におったんなら。その年の夫婦に会話なんかあるもんね。

貴実子　一緒に買い物したり、ウォーキングしたり、楽しそうに話してる老夫婦、いたるところで見るよ。

母　それはそれ。よそはよそ。うちはうち。

貴実子　……お母さんだって気づいとったくせに。

母　そんなこと今言ったって意味なかろうもん。

貴実子　おばあちゃんさ、自分のお見舞いにきてくれた人になんて言ったか知っとう？おばちゃんのさ、職場の先輩がお見舞いにきてくれたんよ。でね、その人がね。おばあちゃんにパジャマを持ってきてくれたんよ。そしたらさ。

母　これは着ません、とか言ったんやろ。

貴実子　うん。「こういうのは私は嫌いだから、持って帰ってください」って。あの時のおばちゃんとその人の顔。おばちゃん、可哀想やった。その人もポカーンってして「そんなこと言われたの初めて」って言ったんやけど、私に気づいて「まあ、こんな素直で天真爛漫なおばあちゃん可愛いかもね」って、笑って私に言ってくれた。いい人やな、って思ったよ。

母　おばあちゃん、お洒落さんやったけん。

貴実子　素敵なパジャマだったよー。

母　あんたのおばあちゃんは、お母さんをいびったりしたことなかったけん。

貴実子　……。

母　あんたのおばあちゃんは、人に嫌味言ったりする人やなかったろうが。思ったことそのまま言うけど、悪意はなかったやろ。

貴実子　そうやけどさ。私にとっては、天真爛漫で楽しいおばあちゃんやったけど。

母　そしたらあんたのおじいちゃんも、おばあちゃんのそういうところを、もしかしたらかわいいって思っとったかもしれんやないの。そりゃ、いろいろやらかしてくれたけども。

貴実子　うちのお父さんに比べたらマシ？

母　……お父さんは大黒柱やけんねえ。おばあちゃんが金使うのとはまた違うたいね。

貴実子　お母さん思うことない？お父さんがまともやったら、って。まともやったらお母さん、病気にならんかったかもしれんかったのに、って。

母　……それ考えてどうなるとね。

貴実子　どうって。

母　それこそ、あんた、今一番言ったってどうしようもないことやないね。

貴実子　お母さんがもし、あの写真の人と、あの写真の人じゃなくてもお父さん以外の人と結婚してたら、お母さんこんな苦労もせずに済んだし、こんなストレスかからずに済んだし、そしたらこんな、ストレスから発症する病気にかからんかったかもしれんやん。

母　やけん、それ言ってもしょうがなかろうが。時は戻せんのやけん。

貴実子　ごめん、お母さん。

母　なんね。

貴実子　お母さん、昔一回だけ私に離婚していいか聞いたことあったやん。あの時、うんってなんで言ってやれんかったんかなって。自分の友達が何人も母子家庭で苦労しとったけん、お金の心配してしまった。そしたら今こんなことになっていないのに。本当にごめん。

母　あんた、そんな昔の話。あんたが小学校の話やないの。

貴実子　おじちゃんも最初怒っとったんよ、お母さんの病気説明した時。お父さんのせいだって。離婚させとけば良かったって。

母　そしたらあんた、大学行けてないとよ。

貴実子　大学行っても正社員になれんかったし、結局今もなれてないままやし。

母　しょうがないやないの、あんときは。そういう世の中やったんやけん。

貴実子　……。

母　あんた、何があったとね。

貴実子　なんもないよ。特に。……ただ、ちょっと。神様ってひどいなって、悔しいだけよ。なんでお母さんなん。なんでお母さんが。まだ私、お母さんを旅行にも連れて行けてないし、ちょっとしたものじゃなくて本当はもっと素敵なものをあげてみたかったし、フランス料理とか連れていってみたかったんやもん。

母　イカ食べに連れて行ってくれたやないね。イカの刺身も天ぷらも、美味しかったやないね。

貴実子　美味しかったけど。美味しかったけどさ。

ドアを叩く音が聞こえる。
貴実子、母動きが止まる。
明かりが変わる。

貴実子　……「広瀬さーん。血圧などを測りにきましたー」と看護師さんが入ってきて、母の指にパルスオキシメーターを挟んだ。

貴実子、話しながらベッドの下に置いてあった酸素ボンベを取りだし、母に装着する。

貴実子　「あら。……広瀬さん、ちょっと息苦しかったりしませんか？血中酸素濃度の数値が低いみたい。ちょっと待っててくださいね。これだとキツイと思いますから」そう言って看護師さんが酸素ボンベを持ってきた。母が痛そうにして、看護師さんが耳ひもを調節した。……酸素ボンベ？なんで？お母さん普通に話してたじゃない。

酸素ボンベのボコボコという音が響き始める。
上手、溶暗。
貴実子のみサス。

貴実子　次の日、医師から説明があった。これからどんどんどんどん、母は酸素を取り込めなくなっていくらしい。例えるなら、水中で溺れ続けているようなものらしい。まともに意識があったらとてもじゃないけど耐えられない辛さになるんだそうだ。だから「この数値を超えたら、モルヒネを投与します」ということだった。溺れているほどの苦しさを、意識をふわっとさせることでよくわからない感じにさせるんだそうだ。……よくわからない感じ。モルヒネなんて映画や小説の中でしか聞いたことないものが、こんな風に自分の生活に関わってくるなんて奇妙な感じがした。医療用麻薬、というものらしい。そうやって苦痛を和らげるしかないところまで、きてしまった。そうやって苦痛をやわらげなければ、生きていくことができない。皆で説明を聞きながら、とうとうきてしまったことに震えながら、父がサインをした。……今日の昼間は皆とまだ少し話ができた。梅干もひとかけら食べられた。モルヒネが投与されたら、もう母は話せないだろう。いや、どのみちそこまで数値が下がってしまったらもう、話せないだろう。選択枝はないのだった。

三場

上手、病室。母が眠っている。
下手、広瀬家の仏間。
仏壇と至るところにダンボールが置いてある。物置に近い感じ。

下手のみ明かりが着く。

貴実子、お仏壇のお鈴を鳴らして、手を合わせる。
必死に祈っている。
祈り終わると、その当たりに散らかっているものをダンボールの上に置く。
だんだん、イライラしてくる。
貴実子、下手にはけて、ごみ袋を持ってくる。
どんどん突っ込んでいく。
父が、下手より入ってくる。

父　　あんた何しようとね。やめんね。

貴実子、いったん手を止める。

貴実子　いつ片付けると？
父　　……。
貴実子　これ、いつ片付けると。全部お父さんの荷物やろ。
父　　待っとかんね。
貴実子　待てん。
父　　待っとかんね！
貴実子　待てんっちゃ！ここに祭壇持ってこないかんのよ。お母さん、もうどうなるか
　　わからんのに！今せんと、間に合わんやろ。
父　　待っとかんね、て！
貴実子　じゃあ、どうすると？お母さんの祭壇置けんやん。
父　　祭壇は居間にでもおけばよか。
貴実子　ここにちゃんと仏間があるのに？
父　　よか。
貴実子　よか、じゃない。だいたいお仏壇がある部屋、こんなに散らかしとるのがありえ
　　ん。お母さんもずっと気にしとったんよ。ご先祖様に悪いって。

貴実子　お母さんの実家は、仏壇も仏間もいつも綺麗にしてあるんよ。お父さんわからんやろうけど。あれを見て育ってきたお母さんを、こんなところに置くつもりなん？

父　待っとかんね、て！

貴実子　なんで！？意味がわからん！今までも片付けん意味がわからんかったけど、こんな状況になっても片付けない意味がわからん。なんなん。お父さんのお医者さんが言いよった、先延ばし癖ってやつなん？何が怖いん？片付けることの。何が怖いんっちゃ！

父　怖くない。

貴実子　怖がっとるやん。

父　怖がっとるわけやないと。

貴実子、無言でゴミ袋に突っ込んでいく。

貴実子　……捨てんけん。これ。いったんこれに入れて二階に移動させるだけやけん。私じゃ、どれが捨てていいものか、わからんけん。……勝手に捨てたら嫌やろ。

父　……。

貴実子、ゴミ袋を持ち上げようとするが重すぎて持ち上がらない。

貴実子　……。

父　お父さんがするけん。

貴実子　今から？それとも明日。

父　待っとかんね。ちゃんとするけん。

貴実子　……。

父　今日は、お父さん疲れとるけん。あんたも疲れとろうが。

貴実子　疲れとるけど……時間がないよ。もう、そんなに時間ないよ。時間ないとよ、お父さん。どうすると？

父　待っとかんね。

上手、明かりが着く。

酸素ボンベのゴボゴボした音が聞こえてくる。

父　待っとかんね。

貴実子　待てん。こればっかりはお父さんに合わせとられん。今から片付けよう。いつお母さんどうなるかわからんのやけん。これから病院に泊まり込みせないかんくなるんよ。ここが、ちょっと片付ければ終わるレベルやったらいいよ。

貴実子　でも終わらんかったら?どっちにしろ、おばちゃんもおじいちゃんにも挨拶したいやろうけん、お仏壇にもお参りすると思うよ。

父　……。

貴実子　片付けは、しだしたら、やれるけん。

貴実子、ダンボールを持ち上げようとするが重たい。

貴実子　こんなの、お父さん一人で二階にもっていけるわけないやん！見境なく買って！

貴実子、段ボールの中を開ける。

貴実子　本もこんなに買ってさ。これどれくらい読んだん?。同じような本ばっかりこんなに。これいつ読むん?

貴実子、別のダンボールを開ける。箱いっぱいに詰まっている三角コーナーの網。

貴実子　いち、にい、さん、しい、ごお、ろく、……にじゅうさん。二十三。なにこれ。なんでこんなに網あるん?三角コーナーの網こんなに買い置きいる?しかもなんでいちいちビニール袋に入れとるん。

父　開けなさんなちゃ。

貴実子　ほんと、おばあちゃんそっくり。おばあちゃんも、いろんなもの袋に入れとったね。袋の塊だらけやったもんね。あれ、私おばあちゃんが年とって、おばあちゃんになったけんって思いよった。違うんやね。遺伝やね。……なんでこんなもの遺伝するん。

父　……。

貴実子　私も同じやった。同じやった、お父さんと。なんでなん。

父　何がね。

貴実子　全てよ。全て。

父　何が。

貴実子　やけん！……私もお父さんと同じやったんよ、おばあちゃんと同じやったんよ、なんで私がこんなものまで引き継がないかんとよ！

貴実子、ダンボールに突っ伏す。

貴実子、鞄の中からパンフレットを取り出して、父に渡す。

父　これ、何ね。

貴実子　発達障害者用の就職支援施設。就職活動する前に、先にここで訓練と支援受けたほうがいいだろうって。なんか訓練したり、就職の面接についてきてくれたりするところらしい。

父　？

貴実子　ハローワーク関連のところらしいよ。まだよくわからんけど。お母さんのことが落ち着いたら、いったんここに通ってから、障害者雇用受ける。

父　なんでね。

貴実子　なんでね、ってどういうこと？

父　やけん、なんで？

貴実子　なんでわからんの？私お母さんのためだけに会社辞めたんやなくて、辞めないかんくなったけん、辞めたんよ。そりゃね、お父さんが定年退職しても、学校辞めてくれんで、病院に行ってもお母さんになんもしてあげんけん、私ばっかりが調整せないかんかったのも、あるよ。お父さんのせいもあるよ。

父　なんでね。お父さんのせいにせんで。

貴実子　ああ。もう。ほんと、もう。……仕事が人並みにできんかったんよ。人に負担かけてばかりで。最終的に掃除しか任せられんことになって。接客業で掃除しかしないってもうそれさ、人員的に無駄やん。棚の掃除だって、そんなにあるわけじゃないしね。私にできる仕事がなくなったんよ。

父　掃除だけって、どういうことね？他の仕事させてもらえんかったとね？

貴実子　お金がね、お金に見えんとよ。どうも私の脳は、お金をお金と認識できないみたいでから。やけん、何故かちょっと忙しかったり他の事を同時にしたら、五千円が千円に見えたりするんよ。それで店長が、お客様の家にお金を返しに行くことがしょっちゅう起きて。それで、他にもいろいろあって、脳の検査を一回受けなさいって会社が。……それで、お父さんの病院に相談したと。それでお父さんと同じ検査を受けたとよ。

父　え―……？それで、どうやったとね？

貴実子　やけん。……ええ！？私の方がええ！？やけど。

父　今まで普通のところで、仕事できよったやないね。

貴実子　できてなかった、ていう説明を今したやん。それで、頑張ってもできるようになるわけじゃないことがわかったけん、ひとまず仕事も辞めたとよ。お母さんのこともあったけど。

父　え―。……そうね。

貴実子　うん。

父　障害者雇用は給料安いとやないね。

貴実子　しょっちゅう首になるよりマシやろ。やけん病院が教えてくれたんよ、その支援のところ。

父　今まで働いてきたところ、全部首になったわけじゃなかろうもん。
貴実子　全部じゃないけど、何回かは首になっとると。てか普通は首ってならんとよ。
父　でも生活できんやないね。
貴実子　……十万きるようなところは受けん。そもそも。あんなの国から補助のお金もらえる人じゃないと無理やん。でも人並みに働けんのに、障害としては軽すぎて、私は補助のお金はもらえんらしいけん。
父　どうにかならんとね。
貴実子　どれくらいどうなるか、やってみらんとわからん。問題は障害者雇用が都会にしかないことやね。
父　それは頑張って通わんね。
貴実子　簡単に言わんで。通うしかないけども。地味に体にくるんやけん、通勤長いと。もう若くないんやけん、私も。
父　頑張らんば。
貴実子　……ああ、ほんと腹が立つ。もう。

貴実子、三角コーナーの網をいくつか掴んで下手に持っていく。
戻ってきて持っていくを繰り返す。

父　あんた何しようとね。
貴実子　三角コーナーの網は台所でよかろうが。
父　今しなさんなって！今しなさんな！
貴実子　今、お父さんが頑張らないかんのは、これ！和室の片付け！和室の片付けです！

貴実子、また三角コーナーの網を掴んで下手に行く。

父　貴実子！

父、残りの三角コーナーの網を掴んで下手に行く。
貴実子、下手より戻ってきて他のダンボールを開けようとする。
父も戻ってきて、それを止める。掴みあいになる。

貴実子　お父さんの馬鹿！
父　馬鹿ってなんね！親に向かって！
貴実子　馬鹿やけん馬鹿っていっただけやん。
父　やめんね！
貴実子　もう、じゃあ、どうするとよ！

父　お父さんがやるって言いよろうが！
貴実子　だけん、それ、いつよー！

貴実子、父を突き飛ばす。
父、畳の上に転がる。

貴実子　……。
父　……。あんた、何するとね！
貴実子　……ごめん。
父　畳で、すったやないね。
貴実子　ごめんて。
父　……あんた、それいつからね？
貴実子　え？
父　やけん。
貴実子　いつから、とかないよ。そんなの、お父さんはいつからそうなん？っていうのと一緒よ。
父　でも、あんた今までそんなこと、全然言いよらんかったやないね。
貴実子　大変だったから。お父さんで。
父　なんがね。
貴実子　お父さんとね、暮らすということはね、ジェットコースターに乗り続けるようなもんなんよ。落ち着くことがないんよ。イライラするばっかりなんよ。
父　なんでね。お父さん何もしとらんかろうが。
貴実子　三角コーナーの網、五十枚入りを二十三袋も買っといて？昨日冷蔵庫見たら、もやし六袋あったんやけどさ、もやしは足がはやいからあんな買ってきたらいかんって前も言ったよね？この間はさ、騙されて金の塊で二十万損したよね？その前は屋根のリフォームにも引っかかったよね？勝手に家族の同意書も書いとったよね？それさ、そういうのさ、毎回私とお母さんが怒って、「もうしない」って約束するけど、一回も約束守ったことないよね？

父、何かを言いかける。

貴実子　一回も守ったことないです、約束。約束という言葉の意味を知らないのかな、ってくらい守ってもらったことないです。いつも反省した振りしても、次の日には破ってます。それ、私が生まれてからずっとそうです。だから結婚した時から、ずっとそうやったんやろうね。ね、お父さん。お父さんさ、お母さんの病気がストレスからくるって聞いた時、どう思ったん？

貴実子　それでも自分のせいじゃないとでも思ったん？お母さんがああなったの、お父さんのせいよ。

父　　！！なんが、お父さんのせいね！お母さんは病気やないね。なんでも人のせいにしてから！あんた、なんてこと言うとね！

貴実子　……。本当にわからんのやね。……もういい。

貴実子、下手にはける。

父、イライラしてそのあたりの物を投げる。どんどん投げる。

立ち上がって足を踏み鳴らす。癇癪をおこしている。

父　　貴実子、貴実子戻ってこんね！貴実子！

父、怒鳴り散らしながら足を踏み鳴らしている。どんどん激しくなる。

しばらく踏み鳴らして、電池が切れたように、ハタ、と止まる。

何かを思い出したように、下手にはける。

少ししてドアを開ける音と鍵を閉める音。

下手から貴実子が入ってくる。

貴実子　えー。もう、こんな時間からどこ行ったん？もう、お父さん。

貴実子、散らかっているものをひとまず三角コーナーの網が入っていたダンボールに詰める。

貴実子　はー……。

貴実子、仏壇の方を向く。

貴実子　おじいちゃーん。これどうしたらいい？これ、ここにさ、四十九日まで祭壇をおかないかんのよ。おじいちゃんの時も、あの狭い団地で置いとったやろ。結構スペース空けないかんのよ。お父さんが出て行っている今のうちにしていいと思う？でもしたらまた癇癪起こすやん。もう疲れるしさ、めんどくさいんよ。はー。ため息しか出らん。

貴実子、下手にはける。

貴実子、缶ビールを手に持って入ってくる。

貴実子、お仏壇の前に座って飲み始める。

貴実子　おじいちゃん。おばあちゃんにこの間会ってきたんよ。あんま行けんでごめんけど。施設の人に、お誕生日のお祝いの写真見せてもらったよ。おばあちゃん、もう九十六才よ。すごいね。でね、百才になったら記念品がもらえるらしいんよ。やけん、おばあちゃん「私は百才です」っていろんな人に言って回ってるんだって。……かわいいね。おじいちゃん。おばあちゃんはずっとかわいいね。自分の気持ちのまま生きてて。……おじいちゃん。おじいちゃんすごいね。おばあちゃんかわいいけどさ、私みたいに親じゃないから、別れようと思ったら別れられたやん。世間的にはおじいちゃんの方がひどいかもしれんけど、私は投げ出さなかったおじいちゃん凄いと思うよ。誰も言わんかったかもしれんけん、私が言うね。おじいちゃん偉い。人並みじゃない人に最後までつきあったおじいちゃんは、偉いし、頑張ったよ。うん。

貴実子、鞄から携帯を出し、しばらく触る。

貴実子　……あ。「イイネ」ついてた。……知らん人や。かわいい。なんでこんな今時女子みたいな子が私の投稿に？

貴実子、携帯をスクロールしている。

貴実子　「五月一日から付き合い始めました！」……へえ、私の誕生日から。わざわざ、断言するところが若い……。……ん？これ……私があげたやつ……。え？

貴実子、携帯の画像を拡大する。どんどんスクロールしていく。

貴実子　はっ！（息を吸う音）

貴実子、携帯を放り出す。

貴実子　私今年の誕生日何してたっけ？あの人は何してたっけ？……。いや、一緒やったやん。一緒やったよ、なんだ。びっくりした。……夕方の便で帰ったけど。いや、でも。わざわざ……。

貴実子、携帯を拾って見る。手の力が抜けていく。

貴実子　うわ……。え？何この女。わざわざ、なんなん。性格悪……。え？これいつイイネつけたん？……あ、結構前や。……会社の後輩なんかな。……ぽい。だいぶ年下やね。会社の人も知ってる感じやね……。……ああ。エネミー（敵）、エネミーやってきた。……勘弁して。私もう人生にエネミーいらんのよ。もういっぱいいっぱいなんよ。あああああああ。

貴実子、お仏壇の前にパタっと倒れる。

しばらく倒れている。

貴実子、起き上がる。ビールを飲み干す。

貴実子　これ、イイネし返したらいいんかな。貴方の存在を認めたらいいわけね。いや、でも敵を満足させることになるよね。敵に塩を贈るようなものよね？いや、違うか。違うわ。そんな義理ない。

貴実子、しばらく携帯を見ている。

貴実子　そりゃ、この子の方が、若くてかわいくてまともで、楽だよね？でも貴方が知らせてくることじゃないよね？あの人から言われるならともかく。……ああ。おじいちゃん。もしかしたらよ。おばあちゃん、何か言われたり、されてたのかも。おばあちゃんもこんな風にして攻撃されたことがあるかもしれん。私の方が上よ、って。愛されているのは私なの、引っ込んでって。……わからんけど。おじいちゃん。おじいちゃんのは認めるけど、おばあちゃんも頑張っとったのかもしれん。私は……。

貴実子、立ち上がる。

貴実子　もう今日は、私は寝ます。いろいろやっていられません。じゃ。

貴実子、お仏壇に礼をして下手にはける。

暗転。

四場

上手、病室
下手、広瀬家の仏間

酸素ボンベのボコボコした音が響いている

母、眠っているか意識が朦朧としているかわからない
貴実子、母の手を握っている。

貴実子　暑い？

貴実子、母の手をもんだりしてみる。
貴実子が母の手をはなすと、母は自分の手を胸のあたりに持っていく。

貴実子　お。

貴実子、母の耳元に顔を近づける。

貴実子　お母さーん、お母さーん。

母の手が少し動く。

貴実子　聞こえてるんやね。

貴実子、椅子に座る。

貴実子　今日ね、大変やったんよ。お父さんがさ、またやらかしたんよ。おじさんが説得してくれたけん、ことなきを得たよ。なんと思う？

母　……。

貴実子　お父さんね、葬祭場をおじいちゃんと同じところにしようとしよったとよ。お父さんの学校が近いけんって。馬鹿やろ。住んでるところ全然違うのに。うちみたいな田舎は近所の人がこれる、家の近くにせないかんのに。いや普通家の近くにするよね、親戚とかうちに泊まらせないかんのに。どういう神経しとんのやろ。まあどれか普通かよくわからんけど。こういうの、結構わからんことだらけやね。

貴実子　……やけん、お母さんもうちょっと頑張って。
母　……。
貴実子　まあ、皆助けてくれるけどね。ごめんね、あんま心配かけること言われてもね。

母の手、少し動く。
貴実子、母の手をとる。

貴実子　なんか楽しい話しようか。明日からまたおじちゃんもおばちゃんも、他の親戚の人もきてくれるって。この病室わりかし大きいけん、皆入るやろ。そうやん、もうすぐしたらお祭りが始まるよ。ちょうどこの病院の道路も、練習する人達が走り出すけん、賑やかになるんやないかな。一週間くらいずっと練習する人の声がここにもいっぱい聞こえると思うよ。
母　……。
貴実子　そうそう、私の東京の人、また日焼けしとって、ますますお母さんの写真の人にそっくりな感じになってきたよ。これからもっと黒くなるんやないかな。仕事も頑張りよるみたいよ。せっかく今は携帯があるんやもんね、もっと……話さないかんね。

母が息を深く吸う。

貴実子　うん？

貴実子、母に耳を近づけてみるが何も聞こえない。

貴実子　お母さん、聞こえとるん……よね？

病室のドアをノックする音
貴実子　はい。

ドアをあけておば（父の姉）が入ってくる。

貴実子　おばちゃん。
おば　貴実子ちゃん、どんな？
貴実子　……。こんな、感じです。

おば、母の顔を覗き込む。

おば　顔色は悪くないね。
貴実子　ああ。そうですね。
おば　……。
貴実子　いや、毎日見てるから。わからなくて。
おば　貴実子ちゃんはそうかもしれんね。あら、あんたのお父さんは？
貴実子　今日どうしてもしないといけないことがあるって言い張って。
おば　ええ？もう。家ね。
貴実子　さあ。
おば　……。
貴実子　一応昼は、家にいましたけど。
おば　もう夕方になるやんね。
貴実子　そうですね。
おば　貴実子ちゃんは今日何時にきたと？
貴実子　それがちょっと寝坊してしまって。
おば　あんたも疲れがたまっとるとよ。毎日ここまできよるんやけん。家からこの病院、ちょっとあるやんね。ちゃんと寝らんば。
貴実子　もう大丈夫です。
おば　あんたのお父さんに渡そうと思ったもんがあったんやけどねえ。そうね。
貴実子　私、預かります。
おば　そうやねえ。……ちょっと説明せないかんことがあるんやけど、お母さんの前ではねえ。
貴実子　一回出ましょうか？

貴実子、おば、病室のドアを開けて出る。
貴実子、病室のドアを閉める、

おば　お寺さんのことたい。一応メモしてきたけど、貴実子ちゃんに言っておくね。これがあんたのおじいちゃんの時に包んだ金額。同じにしとかんね。それとお車代。これは別の封筒に入れて、お車代って表に書くとよ。あんたのお父さんもやり方覚えとると思うけど。
貴実子　はい。
おば　法事はどないするとね？お寺が遠いんやけん、葬儀で初七日まで一緒にする段取りにしとかんね。
貴実子　……。
おば　あんたのとこのお母さんは親戚が多かろうが。やけんもうね、お葬式の日に一緒にしてしまいなさい。

貴実子　……それは、どうしたらいいんですか？
おば　葬祭場に頼めばいいとよ。聞かれるやろうけん。ま、段取りは後でもいいと。意外とお通夜まで時間あるけん、細かいところとかは説明きいてしたらいいと。要はあんたのお父さんに、式の代金とは別に、これだけおろしときなさいって伝えて。
貴実子　同じでいいんですか？
おば　何が？
貴実子　いや。おじいちゃんと同じ金額でいいんですか？うちのお母さんの。
おば　そうよ。長男の嫁やし。こういうのはね、少なくても多くても後後大変だから、同じがいいと。それにあんたのお母さんは、うちのお母さんを看てくれたやないの。
貴実子　おばちゃん！おばちゃん、それ、お母さんの前でしてよかったのに！今の話、お母さんの前でしてよかったのに。
おば　できんよ、こんな話、本人の前で。いくらなんでも。
貴実子　だっておばちゃん、おばあちゃんの時。……いや、おばあちゃんを引き取る時、お母さんが啖呵切ったって聞いてたから。
おば　……確かにおばちゃんも余計なこと言ってしまったけど。
貴実子　……。
おば　あんたのお母さんの方が、若くてまだまだこれからやったのに。こんなことになってから。もっと早く、おばちゃんも。
貴実子　それはもう、いいと、おばちゃん。言っても仕方ないことやけん。
おば　……そうね。あんたがそう言うなら、いいたい。……じゃあ、ちょっとおばちゃん、お母さんに挨拶してから帰るね。きたばっかりやけど。

おば、病室の中に入る。ドアは開けたまま。
おば、母の耳元で何かを言っている。
貴実子はそれを見ている。
おば、病室から出てくる。

おば　じゃあね。貴実子ちゃん。またくるやんね。
貴実子　はい。

おば、上手にはける。
貴実子、病室に入る。
貴実子、おばからもらった紙を見ている。

貴実子　そうか。お坊さんのお布施とかもいるったいね。……こんなかかるんや。

貴実子、紙を鞄にしまいこむ。

貴実子、母の手をとる。

母、動かない。

貴実子　お母さん、寝とうと？起きとうと？

貴実子、しばらく顔を見る。

貴実子　お母さん。

母　……。

貴実子　お母さん、私ね。……どう生きていっていいかわからんのよ。やけん、起きて？

母、動かない。

貴実子　お母さん、片付けしよったら母子手帳が出てきたよ。二才なのに、パパ、ママなど二語しかしゃべりませんって書いてあった。お母さんよく、私が三才まで全く喋らんかったって言いよったやろ。本当やったんやなって。祈祷師さんとかにも連れて行ったって言いよったね。でも三才過ぎたら機関銃のようにしゃべりだしたって。全く問題なかったって。お母さん。……私本当に問題なかった？

酸素ボンベのボコボコという音が大きくなって響く。

貴実子　幼稚園のお泊り保育の時、私一人だけ起きれず寝てて、起きたら皆整列しとった光景、今も鮮明に思い出せるんよ。私ずっと小学校に入っても指しゃぶりしよったし、おねしょもしよったやん。中学校の時、学年全員受けさせられた知能テストでさ、友達は皆ちゃんと数値が書いてあったのに私だけ、Mって書かれとったんよ。これなんやろって思ったら先生たちが私をみてヒソヒソってしたと。その後転校した時、担任になった先生が随分とくっついてくるからなんだろうと思ってたら、私は人一倍心配な子だから、みたいなことを言ったんよ。ねえお母さん！……本当に、知らんかったん？

酸素ボンベのボコボコという音が速くなる。

貴実子　私が、発達障害って！障害があるって！

酸素ボンベの音が一瞬止まる。静寂。

貴実子　……。

母　　……。

酸素ボンベのボコボコという音が規則正しくなる。

貴実子　ごめん、お母さん。今こんなこと言ってもしょうがないね。言われたところで……困るね。最期まで困らせる娘でごめん。そうよね、あの時代はそういう時代やなかったもんね。結局私が学校で馴染めんかったのも、就職活動がうまくいかんかったのも、まさかそういうことって思わんよね。私ね、お母さん。五人おったら、必ず一人には嫌われるっちゃん。なんでかわからん。でも、何こいつって嫌悪感持たれたのは感じ取る。でもそうなった時ってもう取り返しがつかんのよ。……あとお母さん、私お金も数えられんのよ、なんでやろうね。

貴実子、母の手提げから例の証明写真を取り出す。

貴実子　お母さん。私、今でもおじいちゃんのことは好きやし、おじいちゃんがしたこと……そんなに悪いことやったんかなって思うっちゃん。だっておばあちゃんもきっと検査受けたら同じ結果が出たと思うもん。おばあちゃん、お父さん、そして私。見事に遺伝やん。一番似たくないところが似てしまった。やけんお母さんがこんなになったように……私も誰かをそうさせるかもしれん。もしかしたら身を引く方が、いいかもしれん。でも相手がして欲しいことがわかって、私がしたことで喜んでくれたの、あの人だけなんよ。こんな私をあんなに理解して愛してくれる人なんて、もう一生出てこんかもしれん。お母さん。もうどうしていいかわからん。わからんのよ、私。これから、未来が待ってると思えんのよ。障害者の給料じゃ安すぎてお父さんと暮らすしかないし、そんなんで未来ある？あるって思う？……ねえ、お母さん。それともモルヒネみたいなもんがあったら、私も、ふわってごまかして生きていけるんかな？

貴実子、その証明写真を手提げに戻すか自分の鞄に入れるか、迷う。

迷っているところで溶暗

五場

上手、病室。ベットは空。
下手、広瀬家の仏間

下手から襖を開ける音

全体明かりが着く。

仏壇以外の物がなくなっている仏間に貴実子がいる。
貴実子の手には喪服と黒い鞄。

貴実子　……！！

貴実子、しばらく立ち尽くす。

貴実子　えっ。えっ何？どういうこと？ダンボールは？

貴実子、滑りかけて、畳を見る。

貴実子　めっちゃ拭きあげてある……！お父さん……！

貴実子、仏間を見渡す。

貴実子　凄い。何もないし。片付けたんよね、お父さんが……。お母さん、お母さん見える？まだ見えんかな。どうかな？ねえお母さん、お父さんが約束を守ったよ。約束守った。お父さんが、約束守った！お父さんがお母さんのために、こんなに綺麗にしたよ。信じられる？ねえ、お母さん。わー、何これ。

貴実子、畳を触る。触りまくる。
貴実子、また仏間を見渡す。
下手から父が入ってくる。
父も手に喪服を持っている。

父　　あんた何しようとね。はよ、せんね。

貴実子　お父さん……。
父　なんね。
貴実子　……いや。お父さんのお数珠は、私の鞄にとりあえず入れとくけん。
父　お父さん、自分で持つ。

父、手を合せて仏壇の引き出しから数珠を取り出す。自分の鞄に入れる。

貴実子　なくさんでよ。まあ葬祭場でも売ってあるけど。
父　なくすもんね。
貴実子　……お父さん。あの荷物どこ行ったん？
父　倉庫たい。
貴実子　倉庫？倉庫って？
父　庭に置いとる。

貴実子、正面向いて襖を開けるジェスチャーをする。

貴実子　あ！倉庫がある！なんで？
父　なんでって。買ったったい。
貴実子　はあ！？……え？幾らした？幾らしたん？
父　二つで十万くらいたい。
貴実子　高っ！え！？足る？お坊様のお布施、足る？ちゃんと包んだ？おばちゃんの紙通り。
父　心配せんでよか。
貴実子　いやいやいやいや。
父　それはちゃんと姉ちゃんの紙通り、包んどる。
貴実子　……お父さん、ちょっと必要なもの揃ってるかもう一度確認しよう。またここに取りに戻ってくるの、大変やけん。
父　よか。
貴実子　よかじゃない。よかじゃないと。

貴実子、父、和室に喪服や鞄を置く。

貴実子　あ、そうよ、お通夜は斎場に泊まるんやけん、着替えも持っていかな。
父　……ひげ剃りが、いるたい。

父、下手にはける。

携帯のバイブ音
貴実子、鞄から携帯を取り出す。
貴実子、しばらく見ている。
携帯切れるが、またかかってくる。
貴実子、意を決して携帯に出る。

貴実子　もしもし。ああ、ごめんね。携帯出られなくて。……うん。明け方。親戚皆に見守られながら逝ったよ。うん。うん。ありがとう。……あのね、話があるの。すべてが終わったら会いにいくね。……くるの？こっちに？そう。……わかった。

貴実子、携帯を切る。
貴実子、仏壇の引き出しから数珠を取り出し、携帯と一緒に鞄に入れる。
貴実子、仏壇をしばらく眺め、手を合わせる。

貴実子　いきなりおばあちゃんよりもお父さんよりも先にお母さんがいきますが、その時はどうぞよろしくお願いします。

貴実子、また畳を触る。触りながら笑いが出てくる。

貴実子　ほんと、つるっつるや。……まあ、今回は。今回はね。葬儀終わったら二階に親戚も泊めないかんしね。

貴実子、畳を触りながら天を仰ぐ。

貴実子　やるだけやってみるわ、お母さん。

貴実子、天を仰いだまま不敵に微笑む。

終わり。